

# 國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.11 No.1

発行人 井上 順孝  
編集人 平藤喜久子  
〒150-8440 東京都渋谷区東  
4丁目10番28号  
電話 (03) 5466-0104  
FAX (03) 5466-9237

## 日本文化研究所 平成二十九年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営 および日本の宗教文化の国際的研究と発信

本プロジェクトは、平成二十一年度  
に本格的に運用を開始した「國學院  
大學デジタル・ミュージアム」  
(<http://kanc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)  
について、機構全体の情報発信の  
有機的連関を図り、日本文化研究  
所が蓄積してきた研究成果や学術  
資産、研究開発推進機構によって実  
施されている研究成果や各種のデー  
タベース等をデジタル化し、主とし  
てインターネットを通して国際的に  
発信していくものとして運営してい  
くことを一つの大きな目的としてい  
る。また学内の学部・大学院で構築  
したデータベース等を横断的に公開  
することにも対応する。

また、二十一世紀COEプログラ  
ム関連事業として構築したEncyclo  
pedia of Shinto (以下EOS)を  
拡充させ、神道文化に関する国際的  
なポータルサイトの構築を目指す。  
さらに神道および日本文化研究の基  
礎資料の翻訳、教派神道関係の収集  
資料の公開など、プロジェクト独自  
のコンテンツの充実も図っていく。  
デジタル・ミュージアムの機能を、  
広く大学教育において活用できるも

のとするための取り組みも行い、ス  
マートフォンを使用した場合の便利  
性の向上や、動画配信のシステム構  
築を目指す。また、研究資産を宗教  
文化教育の教材として展開させてい  
くにあたっては、平成二十三年に宗  
教文化士制度の運営を目的として発  
足した「宗教文化教育推進センター」  
と連携していく。なお、宗教文化士  
制度については、國學院大學も設立  
当初から参加し、神道文化学部、日  
本文化研究所の教員が運営に関わっ  
ている。

平成二十八年には、研究開発推進  
センターを中心に行ってきた「古  
事記学」の構築事業が、文部科学  
省平成二十八年年度「私立大学研究プ  
ランディング事業」タイプB(世界  
展開型)に採択された。それにと  
も、研究事業には古事記学と関わ  
る部分も多いので、連携して研究を  
進めていくこととする。

一、デジタル・ミュージアムの運営  
デジタル・ミュージアムは、平  
成二十一年度本格的に運用を開始  
したもので、研究開発推進機構全体  
の情報発信の有機的連関を図り、日

### 目次

◆ 日本文化研究所 平成二十九年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営	1
◆ 日本文化研究所 平成二十九年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開 —明治期の国学・神道関係人物を中心に—(遠藤潤)	3
◆ 学術資料センター 平成二十九年度事業計画①② 館蔵文化財の資料化と研究公開	4
◆ 学術資料センター 平成二十九年度事業計画③ 館蔵史料のデジタル化と研究公開(内川隆志・深澤太郎)	4
◆ 神道祭祀・儀礼の研究と展示公開(大東敬明)	5
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十九年度事業計画① 國學院大學における大学アーカイヴズ体制の基盤整備(渡邊卓)	6
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十九年度事業計画② 國學院大學の学術資産の研究と展示公開(渡邊卓)	7
◆ 研究開発推進センター 平成二十九年度事業計画① 研究開発推進センター研究事業(宮本蒼士)	8
◆ 研究開発推進センター 平成二十九年度事業計画② 國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」(宮本蒼士)	9
◆ 古事記学センター 平成二十九年度事業計画 文部科学省平成二十八年年度「私立大学研究プランディング事業」採択 「古事記学」の推進拠点形成—世界と次世代に語り継ぐ 「古事記」の先端的研究・教育・発信—(渡邊卓)	10
◆ 國學院大學博物館 平成二十九年度事業計画 事業計画・人事一覧	11
◆ 彙報	12
◆ 資料紹介 「二英斎芳艷画 新材木町附祭礼」	14

本文化研究所が蓄積してきた研究成  
果や学術資産、研究開発推進機構に  
よって実施されている研究成果や各  
種のデータベース等をデジタル化  
し、主としてインターネットを通し  
て国際的に発信していくものとして  
運営されてきた。

運営に当たっては、本事業の担当  
者、研究開発推進機構の各機関の  
データベース担当者および研究開発  
推進機構事務課、図書館、広報課、  
ソフト提供会社の担当者からなる  
「デジタル・ミュージアム・ワーキン  
ググループ」を組織し、定期的に会

合を重ね、問題点を共有しながら、  
利用者およびデータベース構築者の  
利便性を高めるための工夫を議論し  
ている。今年度についても、引き続  
きワーキンググループを重ね、改善  
に取り組み、また新しいデータベー  
スの公開も準備していく。

二、デジタル・ミュージアムの展開の  
ための独自のコンテンツの構築  
現在デジタル・ミュージアムで  
は、日本文化研究所の独自のコンテ  
ンツとして、いくつかの英語のデー  
タベースを構築し、公開している。  
主要なものとしては、神道事典の英

語版であるE・O・Sや神道・日本宗教に関する研究論文を、外国語から日本語に、また日本語から外国語に翻訳して公開するデータベースArticles in Translation (双方向論文翻訳)、一九五八年に日本で国際比較宗教学宗教史世界会議 (IAHR) が開催されるにあたって作成したBasic Terms of Shinto 神道基本用語集がある。さらにE・O・Sのなかに初心者向けのコンテンツとしてImages of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide 図説による神道入門も公開している。

これらのコンテンツは、現在のデジタル・ミュージアム上では、日本語に習熟していない外国人にとっては、見つけづらく、使いづらい状況におかれている。そこで神道に関する情報へのまき入り口となるべきサイトを作成したいと考えた。これは英語だけではなく日本語版も視野に入れ、国内外の学生が神道を学ぶときに活用できるポータルサイトを目指す。今年度はレイアウトの検討を行いつつ、各データベースの内容を充実させることに注力していく。

## ② 神道古典の英語訳

本事業では昨年度から古事記の英訳に着手している。訳に当たっては「古事記学」の構築<sup>1)</sup> 研究事業と連携し、雑誌『古事記学』に掲載されている古事記の現代語訳、注、補注の翻訳を行っている。すでに述べたように「古事記学」の構築<sup>2)</sup> が「私立大学研究ブランディング事業」に採択され、全学的な事業となったことにもない、基本的には「ブランディング事業」として行い、本プロジェクトでは、全面的にサポートす

るという体制となる。

## ③ 収集している教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

現在は、福岡県北九州市小倉南区に本部を置く神理教の教祖・佐野経彦関連の資料として『本教神理図』を公開している。本年度は加えてこれまで収集してきた神理教や神道修成派を中心とする教派神道、神道系新宗教に関する文書資料について、公開を進めていく。これにより教派神道、神道系新宗教の研究の進展に資することができると考えている。

## ④ 現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

日本文化研究所では、一九九五年より「宗教と社会」学会のプロジェクトと連携し、学生宗教意識調査を実施してきた。平成二十七年には第十二回学生宗教意識調査を実施し、約二〇年にわたる調査に一つの区切りを付けた。本年度は、過去二〇年分をまとめた成果の公開について、考察篇を刊行する。

現代宗教についての調査、研究成果の国際発信、教材としての提供のため、井上順孝著『新宗教の解説』について英訳を刊行する。

## ⑤ 日本文化、宗教に関する教材の作成、オンライン公開

学術メディアセンターに設置されている「宗教文化教育推進センター」と協力し、日本文化、宗教文化教育のための教材作成を進めていく。現在は「世界遺産と宗教文化」、「映画と宗教文化」、「博物館と宗教文化」といったデータベースを公開してお

り、その拡充とあらたなデータベースの研究を進めていく。なお、これらはスマートフォンアプリ「ロケスマ」でも公開している。

## ⑥ 教材動画のシステム構築

E・O・Sでは、これまで多数の動画を作成し、公開してきた。ほかにもこれまでの研究所のプロジェクトを通し、貴重な宗教文化に関する動画が撮影され、デジタル化が進められてきている。これらの動画資産を日本文化、宗教文化を学ぶための教材として国内外で広く使えるようにするため、公開の仕組みについて検討を始めることとした。今年度は、動画の整理、データベース化を進めるかなどについて検討を行う予定である。

## ⑦ 国際的な教材研究の展開

本事業における宗教文化教育の取り組みについて、国際学会の場で紹介し、今後の研究者のネットワーク形成をはかる。具体的には本年七月にスイス、ローザンヌ大学で開催される国際宗教社会学会において、井上順孝が研究発表を行う。

研究発表のタイトルはThe Specific and Common Aspects of Religious Culture Education である。セッションはSession STS 37: Religious Research in Contemporary Asia-Pacific Regions であり、主に現代におけるアジア太平洋地域の宗教現象、研究について取り上げられる。

このセッションの企画は、本事業の代表者である平藤であり、司会を行う。この場で、成果を問うとともに、同様の関心を持つ研究者と情報交換、ディスカッションも行う予定とされている。

## 四、日本文化研究所国際研究フォーラムについて

毎年日本文化研究所の行事として行っている国際研究フォーラムだが、今年度は古事記学センターとの共同開催とし、十一月二十六日に「日本の宗教はどう教えられているか」と題して実施することとした。本国際研究フォーラムでは、主に日本国外の学生を対象として「日本の宗教はどのように教えられているか」ということを論点として設定する。何らか日本の宗教についての講義を実際に担当している方に発題を依頼し、受講学生の興味関心、教育の方法や情報通信技術の活用状況、あるいは現状において問題となっている点などについて述べてもらった上で、ワークショップ的に実践的な意見交換を行う予定である。登壇者は、現在のところ次のようになっていく。

Micha Auerback マイカ・アワーバック氏 (ミシガン大学日本研究センター、准教授)  
David Weib デヴィッド・ヴァイス氏 (チュービンゲン大学日本学科、講師)

Clinton Godart クリントン・ゴダール氏 (北海道大学現代日本学プログラム、専任講師)

Cynthia Bogel シンシア・ボーゲル氏 (九州大学人文科学研究院哲学部門、教授)

平藤喜久子 (國學院大學)

その他一名を予定している。本研究フォーラムの開催を通して、研究事業の成果発信、また国際的なネットワーク形成を進めていきたい。(文責・平藤喜久子)

## 日本文化研究所 平成二十九年度事業計画②

### 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開 — 明治期の国学・神道関係人物を中心に —

#### ① 研究事業の目的

本事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、「神道・国学研究部門」の研究事業であり、「国学研究プラットフォーム」の維持・展開を目的としている。この研究事業では、「国学研究の基礎的データ構築」および「国学に関する研究連携のための組織づくり」を主な柱として、明治期の神道・国学関係人物の基礎的情報の収集・整理およびそれに関する研究会の運営および得られた研究情報の公開を行う。前者については、明治期の国学者および神道関係人物(神社・教派神道など)に関する信頼しうる基本データを収集し、研究開発推進センターで構築している国学関連人物データベースと連携しつつ、データを公開しうる形へと構成する。

#### ② 事業の特色及び予想される成果

明治期の神道・国学に関しては、これまで重厚な研究の蓄積がある。研究成果については、これまで旧日本文化研究所および研究開発推進機構各機関などによって文献目録などにまとめられてきたが、この研究事業では、人物をインデックスとして先行研究の到達点を再整理するとともに、資料調査によって、新しい知見をこれに加えることによって、当該分野

の研究をまた一歩前進させる。

#### ③ 事業全体の内容

##### I 国学に関する基礎的研究

明治期の国学者および神社・教派神道関係人物の調査・研究

近代における国学から関連領域(信仰、学問、そのほか)への展開の調査・研究

##### II 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開

明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する先行の目録類、「国学関連人物データベース」の記載事項の確認ならびに関係分野の先行研究の確認と内容の検討

明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する基礎的データの収集・整理・公開

「国学研究プラットフォーム」によるこれまでの研究成果の整理と発信

旧日本文化研究所収集資料(特に近代の神道・国学関係資料)の現存状況の確認

学内外の国学研究状況の把握

III 国学に関する研究連携のための組織づくり

国学研究会の運営

・ 学内文書研究会の運営

④ 平成二十九年度の研究事業計画  
担当者は下記の通りである(平成

二十九年六月一日現在)。

研究代表者 遠藤潤(神道文化学部准教授)、専任教員 齋藤公太(研究開発推進機構助教)、兼任教員 松本久史(神道文化学部教授)、PD研究員 鈴木聡子、同 丹羽宣子、研究補助員 問芝志保、客員教授 林淳、共同研究員 一戸渉、小田真裕、芹口真結子

##### I 国学に関する基礎的研究

(一) 先行の目録類などによる明治期の人物の確認を前提として、当該期の国学者、神道関係人物、教派神道関係人物などに関する著書・論文についての網羅的なリストを作成しつつ、重要な研究成果について研究会で報告を行う。また、平成二十八年度までの史料調査で確認した内容について、検討・研究を継続する。先行研究が少ないが明治前期に重要な活動をした人物については、関係論文を執筆する。

(二) 上記(一)とあわせて、平成二十八年度と同じく近代に国学から関連領域(信仰、学問、そのほか)へと展開した人物の調査・研究を切り口として、江戸後期から明治期にかけて国学を学んだ人々が、近代に入ってから教派神道や仏教その他の信仰へと活動を広げた様子、あるいは、明治期に新たな国学研究をはじめ文献学や近代の人文諸学などに学問を展開させた様子などを、一次文献や先行研究の調査を踏まえて研究する。特に幕末〜明治前期の重要な史料については出張調査も行う。

##### II 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開

(一) 明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する先行の目録類、「国学関連人物データベース」の記載事項の確認ならびに関係分野の先行研究の確認と内容の検討、ならびに調査項目やデータ設計などの具体的検討、基礎的データをもとにした項目執筆などを継続して行う。

(二) 今年度は、前年度よりひきつづき、明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する基礎的データの収集・整理を行う。データの整理については、研究員とともに作業協力者が従事する。データについては、三年間の研究事業が終了するたため、整った形でのまとめと保管を決定・実施し、デジタル・ミュージアムで公開する。

(三) 「国学研究プラットフォーム」によるこれまでの研究成果の整理と発信、旧日本文化研究所収集資料の現存状況の確認も継続して行う。

##### III 国学に関する研究連携のための組織づくり

(一) シンポジウム「明治期における国学と教派神道(仮題)」を開催する。

(二) 江戸時代後期から明治期までを主たる範囲とした報告を順次行う国学研究会を月一〜二回程度開催する。

(三) 主として近世から近現代における神道・国学関係一次文献の読解・学習を目的とした、学内文書研究会を運営する。

(文責・遠藤潤)

## 學術資料センター 平成二十九年度事業計画①～② 館蔵文化財の資料化と研究公開 館蔵史資料のデジタル化と研究公開

### 一、これまでの事業

國學院大學博物館では、昭和三(一九二八)年に考古学陳列室を設置して以来、今日に至るまで収集してきた考古資料・民俗資料と、かつて本学に関係した研究者らが遺した画像記録・図面・ノート類・絵葉書など、多様な史資料を収蔵している。これら、旧考古学資料館時代から管理してきた有形文化財や、旧日本文化研究所の「学術フロントティア事業」を継承して本格的な整理・公開を行っている史資料の研究を実施しつつ、更に新たな学術情報を生成していくことが、学術資料センターの役割でもある。

従来の事業では、開館当初から引き継いできた列品台帳のデジタル化、並びに台帳と現有物件を照合する列品確認を進め、外部に移管した列品や、未登録資料の把握に努めてきた。また、折口信夫資料・柴田常恵資料・大場磐雄資料など、多様な関係史資料についても、個々のデータベースを積み重ねていくことによって、館蔵文化財の学史的的位置付けに寄与している。

### 二、館蔵文化財の資料化と研究公開

#### (Ⅰ) 事業の目的

本事業では、館蔵文化財の管理・運用に係る基礎的な作業を継続して実施するとともに、関連情報の一般

公開を進め、博物館資料が広く利用・活用されるための前提を整えていく。

一方、これまで重点を置いてきた基礎作業から、研究公開事業への脱皮を進め、出土遺跡が明確な一括資料の調査研究や、館蔵点数の豊富な特定資料群を対象に、その文化財的価値を高めるためのサブプロジェクトを実施し、成果を博物館における展示活動(特別展・企画展・特集展示・相互貸借特集展示)へ反映させる。

このような中で、博物館の創立九十周年となる平成三十(二〇一八)年に、考古展示室のリニューアル等を実施するため、新たな展示計画を策定すると同時に、今後優先的に修理して展示に活用すべき列品の選定も進めていきたい。

#### (Ⅱ) 事業計画

列品管理、及び新規受け入れ物件の登録と、未登録物件の概要確認を基幹とする列品管理・登録機能は、館蔵資料を保存・活用するための前提である。

その上で、館蔵文化財を対象とした調査研究機能を拡充し、最終的な展示公開を目指した資料研究・テーマ研究・祭祀遺跡研究拠点構築の三部門からなるサブプロジェクトを実施する。具体的には、先史班(縄文土器・土偶・石棒等)・原史班(祭祀遺物・埴輪等)・有史班(和鏡・石製

塔婆等)・外国班(旧鞍山中旧蔵資料等)・民俗班(民俗資料)による資料研究と、紀年銘和鏡の集成研究・伊豆地域の宗教考古学的研究をはじめとするテーマ研究、そして伝統文化リサーチセンター事業を後継する祭祀考古学研究拠点の構築を推進していく。これらの成果の一部は、博物館における「モノのチカラ・ヒトのチカラ」展・「いのちの交歓(仮)」展、並びに神道部門と共同して実施する「神道の形成と古代祭祀」展や、創立九十周年事業に予定している常設展のリニューアルなどに反映していく予定である。

加えて、同時に展開する「館蔵史資料のデジタル化と研究公開」事業や、博物館本体と連携した情報公開機能として、列品台帳公開・デジタル情報公開の準備を進めていく。

### 三、館蔵史資料のデジタル化と研究公開

#### (Ⅰ) 事業の目的

旧日本文化研究所の「学術フロントティア事業」を継承する本事業では、館蔵史資料の管理・運用に係る基礎的な作業を継続して実施するとともに、関連情報の一般公開を進め、史資料が広く利用・活用されるための前提を整えていきたい。一方、これまで重点を置いてきた基礎作業から、研究公開事業への脱皮を進め、学史的に重要な資料や、纏まった資料群を対象に、その文化財的価値を高めるためのサブプロジェクトを実施し、成果を普及事業や刊行物等によって公開していく。

これらに加えて、國學院大學博物館の館史情報を収集し、創設から今

日に至る歴史を詳らかにする。館祖である樋口清之博士の業績を収集し「樋口学」アーカイブを構築することも重要な作業となる。

#### (Ⅱ) 事業計画

これまで構築してきた画像データベースを基礎として、館蔵史資料及びそのデジタル化情報の保存・保管システム整備に加え、未だ充分でない未整理資料の実態把握を進めていく。

また、本事業のサブプロジェクトとして、学史的にも重要でありながら資料化が遅れていた館蔵史資料や、纏まった資料群の調査研究を実施し、その成果を普及事業や刊行物によって公開するとともに、博物館における展示公開活動に反映させていく。今年度は、柴田常恵草稿類・齋藤ミチ子写真資料・館蔵資料を主たる対象に、資料整理を進めていきたい。特に、齋藤ミチ子資料所収の民俗画像については、フォーラムの実施も計画している。

更に、過年度より継続的に実施している社寺等絵葉書資料については、北陸四県(新潟・富山・石川・福井)と、熊本地震の被災地である九州二県(熊本・大分)のデータについて、デジタルミュージアム上での公開を実施する。

なお、これら二つの事業では、研究員等のほか、学芸業務を担う臨時職員として学生を任用し、博物館活動の実務を推進する。博物館・学術資料センターの研究・公開事業と、学部・大学院教育の連携であり、専攻学生の育成や、キャリアデザインに資することを期待したい。

(文責・内川隆志、深澤太郎)

## 學術資料センター 平成二十九年度事業計画③ 神道祭祀・儀礼の研究と展示公開

はじめに

研究事業「神道祭祀・儀礼の研究  
と展示公開」(以下、「本事業」)は、  
これまで學術資料センター(神道資  
料館部門)が行ってきた神道資料の  
収集や整理作業、研究を継承しつつ、  
祭祀や祓といった神道に関わる儀礼  
に焦点を絞って研究を進めようとす  
るものである。

### 平成二十八年度の研究成果

平成二十八年度は平成二十六年度  
より実施した研究事業「祭祀・祭礼  
の変遷に関する研究と関連資料の整  
理分析」(以下、「前事業」)の終了年  
度にあたり、その研究成果のまとめ  
と公開に力を注いだ。

まず、國學院大學博物館において  
企画展「祭礼行列―渡る神と人―  
(同年十月十五日～十二月四日)を  
開催した。ここでは「渡る人々」「渡  
る神輿」「渡る山・鉾・屋台」「近代  
の祭礼」の四章を設け、これにより、  
日本の祭礼史を示そうと試みた。こ  
のなかでは特に神輿の発生に注目し、  
一定の場所に鎮座する神を神輿に乗  
せて動かすことができるという考え  
の発生は日本における神観念と祭礼  
の画期となったと位置づけた。

これに合わせて、ミュージアム  
トークやミニシンポジウム「神輿文  
化を考える」を開催し、本事業の研  
究成果を社会に還元した。特に後者

については、その成果を『神輿文化

を考える』(國學院大學學術資料セ  
ンター編集・発行、平成二十九年二  
月)としてまとめた。この論集には、  
笹生衛「お神輿こと始め―「神」と  
「祭」の考え方から読み取る物語―」、  
西山剛(京都府京都文化博物館学芸  
員)「神を昇く人々―祇園会・北野祭  
礼を中心に―」、岸川雅範(神田神社  
権禰宜)「神輿の近代―大正期に盛  
り上がった東京の祭礼―」を収め、  
現在、祭りの象徴ともなっている神  
輿及びそれをめぐる文化の変遷の大  
枠を示した。

また、前事業の成果をまとめた  
ブックレットとして『祭祀・祭礼の  
変遷―古代・中世を中心に―』(國學  
院大學學術資料センター編集・発行、  
平成二十九年二月)を刊行した。こ  
れには笹生衛「祭祀の起源」、岡田莊  
司「律令国家の祭祀―祈年祭の始  
原」、鈴木聡子「平安時代の祭祀」、  
加瀬直弥「中世前期の祭祀と信仰」、  
吉永博彰「中世後期の神社と祭祀」、  
祭礼」、大東敬明「祭礼の変遷」及び、  
各論として木村大樹「大嘗祭の祭儀」  
「伊勢の神宮の祭り」を収め、古代か  
ら中世までの祭祀・祭礼の展開をま  
とめた。

機関誌である『館報』十六号(國  
學院大學學術資料センター編集・発  
行、平成二十九年二月)においては  
「祭祀の場」をテーマとし、笹生衛

籬―その実態と古代祭祀―、加瀬  
直弥「神社社殿の一般化と、古来の  
目的を求めて」、木村大樹「宮中にお  
ける祭祀の場」、吉永博彰「建築儀礼  
の場と御幣の役割」、大東敬明「洛中  
洛外図の中の吉田社・斎場所」を収  
め、祭祀が行われる場の諸相につい  
てまとめた。

このほか、「葵祭図屏風」「上賀茂  
競馬・やすらい祭図屏風」「和歌山東  
照宮御祭礼絵巻」ほかのデジタル化  
も進めた。

### 本事業の概要

先述の通り、平成二十九年より  
開始する本事業は、祭祀や祓といっ  
た神道に関わる儀礼に焦点を絞って  
研究を進め、それに関わる學術資料  
センター所管資料と学内所蔵資料に  
ついて調査・研究をすすめる。この  
際、祭祀に関わる諸理論ではなく、  
資料そのものに依拠したい。

これは、本部門が、神道の内容や  
歴史を「モノ」資料の整理・分析・  
研究を通じて理解し、それを展示公  
開すること、本学学生を中心に、学  
内外の研究者、一般の方々にも神道  
を理解していただくことを、使命・  
役割としているためである。

本事業の主たる研究対象は、古代  
以降の神道に関わる祭祀や儀礼であ  
る。

具体的には神道の祭祀や儀礼に関  
わる文字資料、考古資料、美術資料  
などについて、現物の調査・研究を  
行い、かつこれまでの研究の再検討  
をおこなう。さらに、現地調査や神  
社境内図などから神社や祭祀の場の

立地を分析する。これにより、各時  
代、各地の祭祀・儀礼の実態と、そ  
の展開を解明する。あわせて、これ  
に関連した思想や文化をも明らかに  
する。

平成二十九年度は、まず四月十四  
日より五月二十一日まで、國學院大  
學博物館において神田神社と共催で  
特集展示「神田祭今昔」を開催した。  
秋季に同館で行う企画展「神道の形  
成と古代祭祀」(十月十四日～十二  
月十日)では、學術資料センター(考  
古学資料館部門)とともにこれを担  
当する。

さらに、平成三十年度には、学外  
諸機関と連携した企画展「列島の祈  
り(仮)」を國學院大學博物館におい  
て行う予定である。同展示は、「神  
祇祭祀」をその中核に据え、本年は  
その準備を行う。

また、前述の本事業の計画に基づ  
き、本部門所管資料のうちより、神  
社境内図の再整理を行い、加えて祭  
祀研究の視点から分析する。

このほか、これまで継続してきた  
所管資料のデジタル化と図書館デジ  
タルライブラリー上での公開、祭礼  
研究についても継続して進め、その  
研究成果を、機関誌やウェブなどを  
通じて適切に公開できるようにして  
ゆく。

(文責・大東敬明)

## 校史・学術資産研究センター 平成二十九年事業計画① 國學院大學における大学アーカイヴズ体制の基盤整備

### 事業の目的

本事業は、自校史に関する学術研究を行い、その遂行の基盤となる大学アーカイヴズ体制の更なる基盤整備をなすことを目的とする。

本センターでは、これまでアーカイヴズ関連事業として「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築」（平成二十二年～二十二年）、「國學院大學における大学アーカイヴズと自校史教育の構築と展開」（平成二十三～二十五年度）を計画・遂行し、校史資料の収集・保存・整理・研究を継続的に行なってきた。しかしながら、所管資料は、いまだ未整理のものも多く、その整理は喫緊の課題となっている。本事業は、それら先行事業を継承する形で、来たる國學院設立百三十年や創立百四十、百五十周年に備えて大学アーカイヴズ体制の基盤整備を行う。

具体的には、本センター所管資料の整理を行いその簡易目録を作成すること、校史資料の一部デジタル化を行うことの二つが挙げられる。特に今日の大学アーカイヴズにはデジタル化が求められており、その方法・規模などについては、今後、厳格な検討を行う必要がある。本事業では、その検討のためテストケースとして校史資料の一部（写真など）デジタル化を行う。

本事業の意義は、学外に対する本

学の自校史発信・周知の一助となるとともに、学内においては、従来の自校史教育と併せて、アーカイヴズ化されたモノを用いることで、具体的かつ視聴覚的に理解可能な自校史教育の展開を促進することにつながる点にある。

### 前年度の成果と本年度の計画

本年度は、校史資料のアーカイヴズに関する研究会を開催することで、本学の校史に関する情報の共有を図り、その研究内容の深化をはかる。その成果は、本学博物館における展示や解説シートの作成・配布を通じて、随時公開していく。また、本センターの教員・研究員が担当する授業等での一部活用も行う。また、大学アーカイヴズのデジタル化の第一段階として、劣化の激しいフィルムなどを外部委託などによりデジタル化を行う。

以下、初年度となる本事業の前提として前年度までに実施した「國學院大學における古典学の展開に関する研究と公開」の成果を提示しつつ、本事業の具体的計画についても説明する。

#### I 自校史教育

校史教育関連としては、例年どおり、共通教育科目「神道と文化」における「國學院大學の歴史」で使用されている、本センター作成の自校

史教育用サブテキスト「國學院大學の一三〇年」（教育開発推進機構共通教育センター発行）のアンケートを関係機関・部署と共同で実施した。平成二十八年度は、前年度から導入されたウェブシステムにより、計一〇七七通（前期八二三通、後期二五四通）のアンケート集計を行った。なお、百三十五周年を迎える本年度は、これまでのアンケート結果を踏まえ、サブテキストの増補・改訂に向けた検討を進める。

#### II 校史資料の整理・展示

校史資料の整理や活用については、学内外からの自校史に関する問い合わせへの対応を日常的に行ったほか、校史関連の文書・図書資料の整理、資料寄贈の対応を行った。

本学博物館における展示作業については、特集展示「折口信夫と『死者の書』」（平成二十八年九月三日～十月十日）を本学博物館校史展示室において國學院大學折口博士記念古代研究所、國學院大學博物館とともに開催し、併せてミュージアムトークや講演会などの関連事業を行った。

また、本年度には、本学創立百三十五周年を記念した「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」（平成二十九年五月二十八日～七月二十三日）を計画・実施するほか、前年度までの國學院大學の古典学に関する成果を踏まえた校史関連の常設展示のリニューアルに向けた計画を検討していく。

#### III 研究業績

本事業における教員・研究員によ

る研究成果としては、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第九号（平成二十九年三月刊）に、塩川哲朗「西田長男の「みこともちてよさし」論」を発表したほか、國學院大學研究開発推進センター編『渋谷学叢書五 渋谷にぎわい空間を科学する』（平成二十九年二月、雄山閣）に渡邊卓「國學院と校地「渋谷」——大学の歴史と文教地区の形成——」を発表した。本年度は、これまでの研究蓄積をふまえ、校史資料のアーカイヴズに関する研究会を開催することで、本学の校史に関する情報の共有を図り、その研究内容の深化をはかる。

#### IV 『校史』、その他

本学の校史に関わる記事などをまとめたパンフレット『校史』第二十七号（平成二十九年三月）を編集・刊行し、尾近裕幸「経済学部開設五〇周年に寄せて」、半田竜介「皇典講究所・國學院大學の神職養成と大日本神祇学会の出版活動」、塩川哲朗「西田長男の神道史研究——宮地直一との関係を中心として——」、半田竜介「杉倉久保季茲大人碑」の小論と資料紹介を掲載した。本年度も第二十八号を刊行予定である。

また、本学の古典研究史に関する平易なブックレットである『國學院の古典学』（平成二十九年三月）を本研究事業の成果刊行物として刊行した。

これら成果の積み重ねを継続的に行うことで、本学における校史教育のシステム整備を進めていく。

（文責・渡邊卓）

## 校史・学術資産研究センター 平成二十九年事業計画② 國學院大學の学術資産の研究と展示公開

### 事業の目的

本事業は、國學院大學所蔵の学術資産の研究とその研究成果の公開という本センターの目的に則り、これまで本センターで遂行してきた「國學院大學の学術資産の研究と公開」(平成二十年～二十二年)、「國學院大學における学術資産研究の発展と公開」(平成二十三年～二十五年)、「國學院大學における日本史学を中心とする学術資産の発展と公開」(平成二十六年)の一連の事業をさらに発展させて、本学の学術資産に関する研究成果を、従来行ってきた本学図書館ホームページ上でのデジタルライブラリーを通じた公開のほか、本学博物館で展示公開すること、校地・渋谷における研究成果の地域還元を果たすことを目的とするものである。また、当該展示は、本センターの教員・研究員が担当する授業等で活用し、研究成果の教育への活用を果たすことも目指す。

果は、本学所蔵の学術資産に関する調査・研究成果を展示により一般公開することで、研究の社会還元・地域還元を果たすとともに、学部授業などでの教育活動に資すること、研究と教育とを有機的に結びつけることである。

前年度の成果と本年度の計画  
本年度は本事業の最終年次であり、前年度までに調査・研究を進めてきた①神道、②古典文学、③中世史、④近世史の四分野を総合した学際的な企画展を計画・実施する。

また、こうした研究・展示活動は、図書館をはじめ学内関係部署と連携しつつ、かつ本構内の関連機関とも協力して進めていく。なお、既存のデジタルライブラリーに掲載されている資料の研究を通じて解説を付す「補充」と、学術的な価値の高い資料をデジタルライブラリーにて新たに公開する「追加」の作業を継続して行う。

以下、本年度事業の前提となる前年度の成果を具体的に提示するとともに、本年度の計画についても説明する。

I デジタルライブラリー解題作成  
デジタルライブラリーの解題作成に関する作業として、前年度は、「伊勢太神宮禰宜謹解、申儀式并年中祭

行事事」(貴二三〇一)、「和歌浦御祭礼御渡絵巻」(貴二七九六)、「拾遺和歌集」(貴三六五五)、「源平盛衰記図会」(貴三八〇〇)、「三八〇五)、「諸大名花押判帳」(旧貴二一九)、「つしま祭」(貴四四八七)といった六本の典籍・資料に関する解説や書誌、写真データを本学図書館との協働により追加した。

### II 本学博物館における研究成果公開

本学の学術資産に関する研究成果の展示公開を本学博物館において二回開催した。

まず、近世史の成果公開として企画展「古文書で〈つなぐ〉江戸時代」(平成二十八年六月十七日～七月十六日)、続いて本機構学術資料センター神道資料館部門との連携展示として企画展「祭祀と神話―神道入門―」(平成二十九年二月十一日～四月九日)を開催し、それぞれ、ミュージアムトークを行い、本部門の研究成果を地域や社会・教育に還元した。

先述の通り最終年次となる本年度は、①神道、②古典文学、③中世史、④近世史の四分野を総合した学際的な展示を開催する。本展示に向けては、各部門にあわせた学術資産の調査・研究を進めつつ、日常的に本センター構成員が意見交換等を通して、その研究を深化させ成果公開へ向けた準備を行う。これら学術資産の調査・研究については、学内調査に限らず、学外所蔵資料との校合などを通じて、資料価値を判断しながら研究を進め、展示公開への資料選

定などを行っていく。

### III 研究業績

本学の学術資産に関する研究成果としては、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第九号(平成二十九年三月刊)に、堀越祐一「秀吉権力と杉原家次」、高見澤美紀「下総国香取郡大根村における野境論と野の利用」の論文二本と、針本正行、太田敦子「國學院大學図書館所蔵『大織冠』の解題と翻刻」、荒木優也「國學院大學図書館所蔵『新古今和歌集』酒井宇吉氏旧蔵本下帖の解題と翻刻」の資料翻刻・資料紹介二本を発表した。また、『朱』(伏見稲荷大社、平成二十九年三月)に大東敬明「御膳谷奉拜所・御饌石と井上頼寿―「御旅所考」にふれながら―」を発表するなど、学外誌においても本学学術資産を取り上げた研究論文を発表した。

また、前年度には本学の校史・学術資産に関する研究会として、「校史・学術資産研究センター研究会」を平成二十九年一月二十七日に開催した。本研究会には本センター構成員のみならず、大学院生など多くの参加者があり、学術資産部門では、本センターの兼任教員である針本正行教授、校史部門では、本センターの渡邊卓助教、高野裕基助教の計三名による研究発表が行われた。

以上、最終年次となる本年度には、前年度までの活動成果を改めて検討し、本事業の総括として『國學院大學校史・学術資産研究』などにその成果を発表していく。(文責・渡邊卓)

## 研究開発推進センター 平成二十九年度事業計画① 研究開発推進センター研究事業

### 事業の目的

本研究事業は、二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、「建学の精神」に基づく国学的研究手法によって、神道・日本文化の独自の研究を推進することを目的として、神社界等からの外部資金の導入による研究プロジェクト、国内外の神道及びその関連領域の研究者・研究機関との連携強化等を企画・立案して実施する単年度事業である。

### 平成二十九年度事業計画

本年度は、「(一) 近代の神道及び神職・国学者に関する研究」、「(二) 神道・国学に関する学内資料の調査・研究」、「(三) 霧島神宮の研究」、「(四) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化」、「(五) 研究開発推進センター研究会の実施」、「(六) 『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』の刊行」等を実施する。

(一) 近代の神道及び神職・国学者に関する研究

本研究は、これまで研究開発推進センターにおいて実施してきた神道・神社関係資料の調査研究、国学関連人物データベース事業、「招魂」と慰霊の系譜に関する基礎的研究、「昭和前期の神道・国学と社会の研究」など、従来の研究成果を基盤としつつ、「近代の神道及び神職・国学

者に関する研究」をテーマとして、

明治・大正・昭和前期の神道を総合的に把握し分析することを目的とする研究事業である。また、二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「古事記学」の構築を基に、文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信―とも連携し、神道古典の解釈等にも着目して、制度・組織・人物・思想などの多様な観点から、当該テーマを検討していく。

また、本研究事業に関連して進めてきた、本社本庁所蔵『皇国時報』の目次作成の成果(昭和十年・十一年分)を、『本社本庁総合研究所紀要』第二十二号に掲載する予定である(『本社本庁総合研究所紀要』及び『本社本庁総合研究所紀要』に掲載された『全国神職会会報』・『皇国』・『皇国時報(昭和五年〜九年)』の総目次を継承)。なお、本研究事業の経費は、院友神職会の指定寄附金による。

### (二) 神道・国学に関する学内資料の調査・研究

右に掲げた「近代の神道および神職・国学者に関する研究」に関わる学内資料の調査・研究のみならず、広く神道・国学に関する書籍・雑誌を対象として、本学図書館、各学部、研究開発推進機構及び機構各機関の所蔵資料を蒐集し、調査・研究をおこなう。

### (三) 霧島神宮の研究

本研究は、霧島神宮からの依頼(平成二十八年三月)に基づき、平成二十八年度・二十九年度・三十年度の三年間、霧島神宮に関わる調査・研究を実施し、平成三十一年度刊行予定の『霧島神宮誌(仮)』を編集・執筆することを目的とする。平成二十八年七月十一日には、霧島神宮誌編集委員会を開催し、阪本是丸國學院大學教授(研究開発推進センター長)を編纂委員長として、編纂委員(本センター専任教員及び学外研究者)、編纂事務局(霧島神宮)が組織され、研究開発推進センターと霧島神宮職員とが協力して事業を推進する体制を整えている。

平成二十八年度には、霧島神宮、鹿児島県立図書館等が所蔵する霧島神宮関係資料の調査を実施したが、今年度も継続して資料調査・研究を実施する。なお、本研究事業に関わる経費は、霧島神宮からの指定寄附金による。

### (四) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化

本事業は、神道・日本文化研究の国際比較を対象として、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所との一層の連携強化を図るとともに、本学と関係の深い国内外の研究機関との連携、研究交流推進の企画・立案をおこなう。具体的には、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所への研究員派遣(平成二十九年四月より、武田幸也研究開発推進センター助教を派遣)、明治神宮国際神道文化研究所との研究交流、明治聖徳記念学会、神道文化会との共催事業(公開

シンポジウム、公開講演会)などを実施する予定である。なお、本研究事業の経費は院友神職会からの指定寄附金による。

### (五) 研究開発推進センター研究会

以上の研究事業、関連事業に関わる研究成果を中心に、研究開発推進センター研究会を開催し、本センターの構成員を核として、機構構成員や学部教員、さらに関心をもつ研究者一般の参加を募りながら、議論をおこなう。特に、本年度刊行予定の『研究開発推進センター研究紀要』第十二号に掲載する論考の進捗状況、本事業の課題等の検討を実施する予定である。

### (六) 『研究開発推進センター研究紀要』の刊行

本研究事業の成果を公開するため、『研究開発推進センター研究紀要』第十二号を刊行する。本紀要の刊行費は、院友神職会からの指定寄附金による。



その他、北海道神宮からの依頼に基づき、明治天皇御増祀五十年を記念して刊行した『北海道神宮研究論叢』(弘文堂、平成二十六年十月)の成果を基に、北海道神宮の「札幌まつり」をテーマとする研究事業を計画している。現時点の計画では、北海道神宮との協議に基づき、当該テーマに関する調査・研究を平成二十九年度から実施し、その成果として、本センター構成員が編集・執筆作業を担当する書籍を平成三十一年度に刊行する予定である。

(文責・宮本蒼士)



## 研究開発推進センター 平成二十九年度事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 地域・渋谷から発信する共存社会の構築

### 事業の目的

本事業は、持続可能な「共存社会の構築」をテーマに掲げ、「領域Ⅰ 渋谷」、「領域Ⅱ 地域(農山漁村)」、「領域Ⅲ 日本」、「領域Ⅳ グローバル化する世界」の四領域を定めて、領域横断的な成果の集約と検証を進める学部横断型の学際的事業であり、「建学の精神」を学術的に具現化することを目的とする二十一世紀研究教育計画委員会研究事業である。

本年度は、平成二十七年度から二十九年度までの三カ年の事業計画における最終年度となる。

### 平成二十九年度事業計画

本年度の各領域の研究調査及び成果公開の実施計画は次の通りである(領域Ⅰを渋谷学グループ、領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを共存学グループが担当する)。

### 研究領域Ⅰ

研究領域Ⅰにおいては、二〇二七年度の完成を目指している渋谷駅周辺の再開発事業を踏まえて、渋谷駅周辺の歴史と現状を対象とする調査・研究を実施するとともに、東京・渋谷の都市形成史を視野に入れた「共存社会」の多様な在り方を模索する観点からの研究をおこなう。

特に、再開発で大きく変貌を遂げる渋谷で働く人々、渋谷に住む人々



渋谷川 (平成29年3月22日撮影)

からの聞き取り調査を継続的に実施するとともに、再開発の対象となっている「渋谷川」をテーマとして研究調査を進める。具体的には、これまで幾度も変貌してきた渋谷川エリア(宮益橋・並木橋)を対象として、新聞記事等による渋谷川の変遷に関する資料を収集して検討するとともに、再開発を念頭に置いた定点観測(写真記録)、聞き取り調査等を実施する。

そして、「再開発と渋谷川―まちづくりと都市河川再生の軌跡―(仮)」をテーマに、渋谷川の歴史を振り返りつつ、その再生とまちづくりに関わる論点を抽出し、渋谷川の未来を考えることを目途として、渋谷学研究会を開催する。なお、同研究会の記録を基に、ブックレットを編集・刊行し、その成果を公開する予定である。

その他、民俗芸能と都市・渋谷との関わりを念頭に、「民俗芸能の舞台公演―その歴史と意義―」と題して、日本青年館、國學院大學、明治神宮、国立劇場等において、民俗芸能が舞台公演として実施されてきた歴史的経緯を振り返るとともに、その意義を検討する渋谷学研究会を開催する。

研究領域Ⅰに関する成果公開については、本年度刊行する『都市民俗研究 第二十三号』等に掲載する予定である。また、「渋谷を科学する」をテーマとして、オムニバス形式の学部授業「國學院の学び(渋谷学)」(平成二十九年度後期)を実施し、研究成果を教育に還元する。

### 研究領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

研究領域Ⅱにおいては、平成二十三年度以降継続して実施してきた東日本大震災被災地のフィールド調査を進め、被災地の地域コミュニティと神社、伝統芸能との関係性などを焦点として、被災地復興に関する今後の課題を検討する。

具体的には、これまでの被災地調査の成果を基に、シンポジウム「復興・伝統文化・ネットワーク―東日本大震災から七年目の今―」を開催することを予定している。特に、平成二十五年年度に実施した共存学フォーラム「震災復興と文化・自然・人のつながり」において展開された、震災復興に関する報告と議論の内容を踏まえつつ、その後の復興における伝統文化の役割や、それに伴う人々のネットワーク形成に関する事例報告と議論をおこなうことで、被災地復興に関する今後の課題を考え

ることが、同シンポジウム開催の目的である。なお、同シンポジウムの記録を基に、ブックレットを編集・刊行し、その成果を公開する予定である。

また、以上の被災地復興に関する研究調査は、平成二十九年度科学研究費補助金基盤研究C「災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究」(研究代表者:古沢広祐)とも連携して、実施する計画である。

研究領域Ⅲにおいては、研究領域Ⅱとも連携しつつ、本学における神道・日本文化研究の蓄積を基に、日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵を再検討し、今後の日本社会における「共存社会」の在り方を探ることを目的として、研究調査を実施する。

また、研究領域Ⅳにおいては、グローバル化する世界における多種多様な「共存社会」の可能性を探ることを目的として、研究調査を実施するとともに、「多文化共存」をテーマとする公開研究会を開催する予定である。

以上の領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに関する研究成果を基に、オムニバス形式の学部授業「國學院の学び(共存学)」(平成二十九年度前期)を実施し、研究成果を教育に還元する。

また、以上の研究領域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの三年間の成果報告と、その内容を総括的に検討することを目的に、「共存社会の構築」をテーマとするシンポジウムを今年度実施する予定である。

(文責:宮本誉士)

## 古事記学センター 平成二十九年度事業計画 文部科学省 平成二十八年度「私立大学研究ブランディング事業」採択 『古事記学』の推進拠点形成 ―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―

はじめに

二十一世紀研究教育計画(第三次)で提起された「日本文化の国際的理  
解に向けた研究(国際日本学)の推  
進」を具現化する研究事業として、  
これまでに『古事記』の学際的・国  
際的研究(平成二十五年度後期か  
ら二十六年度)、『古事記学』の構築(平  
成二十七年度から二十八年度)  
事業が行われてきた。そして平成二  
十八年十一月に、文部科学省が推進  
する私立大学研究ブランディング事  
業タイプB【世界展望型】に当該事  
業が採択されたことをうけ、規模を  
拡大して新たに事業を展開する運び  
となった。

本事業目的としては、國學院大學  
(以下、本学)において創立以来一三  
〇年以上にわたり継承されてきた学  
知に基づく学際的・国際的観点から  
『古事記』を再定位し、本学独自の『古  
事記学』の見地による、二十一世紀  
の『古事記伝』となるべき註釈書を  
編纂し、その研究成果を国内外に発  
信するほか、成果を教育へと還元す  
るシステムを構築する。そして『古  
事記』に立脚した、日本文化の新た  
なる創造と発展に寄与する世界的研  
究拠点となることを目指すものであ  
る。

### 古事記学センターの設置

文部科学省によるブランディング  
事業に採択されたことに伴い、学術  
メディアセンター五階に研究・教育  
拠点として古事記学センターが設置  
された。センター長には谷口雅博准  
教授が着任した。また事業規模が拡  
大したため、本事業構成教員の増員  
と研究体制の刷新を図った。全学部  
より三十八名の教員が招集され、研  
究グループも細分化されることで、  
より専門性に特化した註釈を作成で  
きる環境が整えられた。また、グ  
ループI(本文校訂・註釈史研究)  
の研究分野を細分化し『古事記』編  
纂以前から編纂以降の受容の在り方  
まで視野に入れた日本文化史におけ  
る『古事記』の意義を検討する状況  
を整えた。

平成二十八年度は、五回の研究会  
と国際シンポジウムを開催し、その  
成果として『古事記学』第三号を刊  
行した。内容は、中心となる『古事  
記』の註釈のほか、国際シンポジウ  
ム「葬送の神話―東アジアの他界観  
と『古事記』―」の講演録、三本の  
論考、敷田年治『古事記標注』の翻  
刻、日本文化研究所との連携による  
『古事記』の英訳(天地初発)である。  
『古事記』註釈の範囲は、『古事記』  
上巻の「三貴子の分治」から「うけ

ひ」までとし、通常の註釈に加えて  
「補注解説」を付して各分野からの観  
点による分析や解説を掲載すること  
で学際的・国際的註釈となっている。

### 平成二十九年度の計画

平成二十九年度は、ブランディン  
グ事業の二年目にあたり、『古事記』  
研究の国際展開を軸として、研究  
面としては『古事記』関連ライブラ  
リーの設置、教育面では『古事記学』  
関連講義の実施、テキスト編集開始、  
発信の大きな柱としては国際発信に  
向けたコンテンツの構築といった事  
業を展開する。具体的な実施計画は  
以下のとおりである。

- ① 共通教育科目「古事記学」の開講。
- ② 『古事記』関連レファレンス環境  
の整備(最終年度まで)。
- ③ 本学関連団体と連携した講演等の  
開催(最終年度まで)。
- ④ 外部機関と連携した学際的・国際  
的ワークショップの開催。
- ⑤ 国際シンポジウム(テーマ「『古事  
記』の翻訳をめぐる」)の開催。
- ⑥ ヨーロッパ日本学会(ポルトガル)  
への参加。
- ⑦ データベース公開に向けた準備。
- ⑧ 『古事記』関連の特集展示。
- ⑨ 『古事記』関連アプリの作成開始。
- ⑩ 『古事記』入門書『子ども古事記』  
の編集開始。
- ⑪ 『古事記』絵画コンテストの開催。
- ⑫ 『古事記』の英訳作成と公開。
- ⑬ 成果論集『古事記学』第四号、刊  
行。

①は平成二十九年度後期より、共  
通教育科目「國學院の学び(古事記

を諸分野から読む)」(金曜四限)と  
して、本事業の参画教員がリレー形  
式で授業を行う予定である。また、  
国際的発信としては、十一月にワー  
クショップ、平成三十年一月には、  
『古事記』の翻訳をテーマとした国  
際シンポジウムを開催予定である。  
⑩は教育に資するため、『古事記』  
テキスト編集事業であり、なかでも  
『子ども古事記』は、幼児・初等教育  
への活用を目的としている。右のほ  
か、HPの多言語化(英・仏・中・  
韓)の推進や、古事記学センターS  
NSの開設と運営や、『古事記』関連  
資料の収集とデジタル化も、前年度  
に引き続き行っていく。

研究成果は、学内定例研究会にお  
いて共有され、年度末刊行の『古事  
記学』四号に掲載予定である。

(文責・渡邊卓)



## 國學院大學博物館 平成二十九年事業計画

### 一. 事業の目的

國學院大學博物館の事業の目的は、建学の精神に基づいた日本文化に関する学術資料を広く調査研究、収集、分類、保管、展示するとともに、学術研究の成果の公開、発信をもって研究教育の支援及び社会貢献に資することである。

平成二十九年度は、研究開発推進機構発足から十年、平成三十年度は研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター資料館としての創立から十年、考古学陳列室の創設から九十年にあたる。また、平成三十二年度には東京オリピックが開催される。

一方、年月の経過により、常設展示や設備等を見直す時期にさしかかっており、これらの節目の年に向けて常設展示の再構成、新たな情報環境の導入、ミュージアムショップの開設等、さらなる基盤づくりを行う必要がある。

また、過去三年の文化庁支援事業の成果や事業モデルに基づいた多様な展示・イベントの実施や、公開承認施設を目指した取り組みも念頭に置いた事業を展開することが期待される。

以上の通り、平成二十九年度は、基盤強化や見直し・改善等に向けた検討を進めつつ、(Ⅰ)展示公開、(Ⅱ)教育普及、(Ⅲ)環境整備・営繕、(Ⅳ)運営支援という四つの柱を軸に事業

を推進する。

### 二. 今年度事業の概要

#### (Ⅰ) 展示公開

##### (1) 常設展示

① 三部門(考古・神道・校史)において、具体的な資料を用いた常設展示を機構内各機関と協働しつつ実施する。② タイムリーな展示替えや各部門の特集展示を実施する。③ 構成、解説等の部分的な改善・変更を行う。

##### (2) 企画展等

本学の学術資料や研究成果をテーマにした特別展・企画展や特集展示を実施する。

##### (Ⅱ) 教育普及

日本文化に対する理解を一層深めるよう、ミュージアムトークやワークショップ、講演会等を企画・開催し、来館者とインタラクティブな関係を取り結ぶ。

##### (Ⅲ) 環境整備・営繕

館内展示設備の営繕の検討。

##### (Ⅳ) 運営支援

ホームページやSNS等インターネットによる情報発信を継続する。来館者アンケートの分析等により運営の改善を行う。英語等での情報発信・展示解説により、外国人来館者の増進、展示理解、および満足度向上を図る。

### 三. 実施計画

#### (Ⅰ) 展示公開

##### (1) 常設展示

展示替え・構成、解説等の部分的な改善・変更を行う(大規模事業は平成三十年年度に実施)。

##### (2) 企画展・特別展

① 「國學院大學春の特別列品」四月十四日(金)～五月二十一日(日)。  
② 「高円宮家所蔵根付コレクション」五月二十八日(日)～七月二十三日(日)。同時開催「有栖川宮家旧蔵資料と國學院大學の歴史」五月二十八日(日)～七月二十三日(日)。  
③ 「モノの力・ヒトの力」七月二十八日(金)～十月九日(月・祝)。  
④ 「神道の形成と古代祭祀」十月十四日(土)～十二月十日(日)。  
⑤ 「いのちの交歓」十二月十六日(土)～二月二十五日(日)。  
⑥ 「國學院大學図書館所蔵吉田家旧蔵資料と吉田神道」三月三日(土)～四月十五日(日)。

##### (3) その他

① 西南学院大学博物館との相互貸借特集展示・相互に年間三回実施。  
② 特集展示・各部門等で十回程度を実施。

##### (Ⅱ) 教育普及

(1) ミュージアムトーク・基本的には特別展・企画展毎に二回程度実施。  
(2) その他、展示に関連したイベント(ワークショップ、講演会、演奏会等)を実施。

##### (Ⅲ) 環境整備・営繕

館内の展示設備の営繕・改善を検討し、空調設備及び館内環境の改

善・整備する。また、老朽・陳腐化した館内情報端末に代わる新たな情報設備の検討を行う。

##### (Ⅳ) 運営支援

(1) ホームページやSNSによる情報発信。

(2) アンケート分析による運営改善の検討と実施。

(3) 英語等による情報発信、展示解説の充実。

(4) その他各方面への営業・広報活動等。

##### (Ⅴ) その他

平成三十年度國學院大學博物館九十周年事業の準備。常設展示再構成の検討、周年記念特別展の準備等。

##### ◎ミュージアム連携事業

平成二十九年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化・こころを理解・体感するミュージアム連携事業」を基本軸とし、地域共働連携事業実行委員会に新たに岡本太郎記念館が加わり、渋谷を中心とするミュージアムとの共働事業を展開する。

特に、多言語化の整備、外国人向けサービスをさらに拡充させ、従来注力してきた日本文化を体験・実感する事業、渋谷文化発信事業などを発展的に継承し、観覧者の体験に基づく日本文化・異文化理解の深化を目指す。

(文責：國學院大學博物館)

## 平成29年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覽

平成29年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信 (H28～30年度)	*平藤喜久子 星野靖二 齋藤公太 吉永博彰	井上順孝 黒崎浩行 藤澤 紫 ヘイヴンズ, ノルマン	市川 取 加藤久子 鈴木聡子 フレレ, チャールズ	村上 晶		土屋 博 ナカイ, ケイト 山中 弘	天田顕徳 李 和珍 ガイタニディス, ヤニス カドー, イヴ 塚田穂高 野口生也 ビュテル, ジャン=ミシェル 牧野元紀 矢崎早枝子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開 - 明治期の国学・神道関係人物を中心に - (H27～29年度)	齋藤公太	*遠藤 潤 松本久史	鈴木聡子	丹羽宣子	間芝志保	林 淳	一戸 渉 小田真裕 芹口真結子
学術資料センター	◎館蔵文化財の資料化と研究公開 (H29～31年度)	内川隆志 深澤太郎	*笹生 衛 小川直之 谷口康浩 青木 敬 朝倉一貴	阿部常樹 鳥越多工摩	伊藤大祐	北澤宏明	朱 岩石 古谷 毅 柳田康雄	荒井祐介 石井 匠 植田 真 奥山 香 粕谷 崇 加藤元康 栗木 崇 惟村忠志 大工原豊 中村耕作 山口 晃
	◎館蔵史資料のデジタル化と研究公開 (H29～31年度)	内川隆志 深澤太郎	*小川直之 吉田敏弘 黒崎浩行 朝倉一貴		黒田迪子			石川岳彦 齋藤しおり 平本謙一郎
	◎神道祭祀・儀礼の研究と展示公開 (H29～31年度)	大東敬明 吉永博彰	*笹生 衛 岡田莊司 加瀬直弥			木村大樹		
校史・学術資産研究センター	◎國學院大學における大学アーカイブズ体制の基盤整備 (H29～31年度)	大東敬明 渡邊 卓 高野裕基	*阪本是丸 齊藤智朗 戸村 理		荒木優也	岡谷成康		
	國學院大學の学術資産の研究と展示公開 (H27～29年度)	大東敬明 高野裕基	*根岸茂夫 笹生 衛 岡田莊司 阪本是丸 千々和到 針本正行	高見澤美紀 堀越祐一	荒木優也			遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業	宮本誉士 大東敬明 渡邊 卓 上西 亘 高野裕基 武田幸也	*阪本是丸 針本正行 太田直之 遠藤 潤 加瀬直弥 菅 浩二 中山 郁 藤田大誠 藤本頼生 武田秀章 谷口雅博	岩瀬由佳 黒澤直道 佐藤長門	神杉靖嗣	半田竜介	赤澤史朗	今泉宜子 河村忠伸 小林威朗 坂井久能 佐々木聖使 佐藤一伯 大丸真美 津田 勉 東郷茂彦 中野裕三 森 悟朗
	國學院大學21世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」 (H27～29年度)	宮本誉士 上西 亘	*阪本是丸 古沢広祐 松本久史		秋野淳一 高久 舞	杉内寛幸		網谷哲成 池田奈津江 木村秀史 康 成文 重村光輝 筒井 裕 西俣先子 野中規正 冬月 律 吉田律人
國學院大學博物館		内川隆志 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 高野裕基 吉永博彰	*笹生 衛			今井信治	尾上周平	安高啓明
古事記学センター	私立大学 研究ブランディング事業 (H28～32年度) ◎「古事記学」の推進拠点形成 - 世界と次世代に語り継ぐ 「古事記」の先端的研究・教育・発信 -	平藤喜久子 渡邊 卓 上西 亘	*谷口雅博 阪本是丸 笹生 衛 武田秀章 松本久史 岩瀬由佳 黒澤直道 太田直之	藤田大誠 藤澤 紫 ヘイヴンズ, ノルマン 青木 敬 遠藤 潤 藤本頼生 佐藤長門	曹 咏梅 キロス, イグナシオ	井上隼人 小野諒巳 大塚千紗子	高橋俊之 西村健太郎	

◎新規研究事業 \*研究事業代表者

## 平成29年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成29年6月1日現在

機構長	井上順孝	
日本文化研究所長	井上順孝	
学術資料センター長	笹生 衛	
校史・学術資産研究センター長	根岸茂夫	
校史・学術資産研究センター長(代行)	笹生 衛	
研究開発推進センター長	阪本是丸	
國學院大學博物館長	笹生 衛	
古事記学センター長	谷口雅博	
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡	
専任教員	教授	内川隆志 平藤喜久子
	准教授	大東敬明 深澤太郎 星野靖二 宮本誉士
	助教	渡邊 卓 上西 亘 齋藤公太
	助教(特別専任)	高野裕基 武田幸也 吉永博彰
兼任教員	教授	井上順孝 岩瀬由佳 太田直之 岡田莊司 小川直之 黒崎浩行 黒澤直道 齊藤智朗 阪本是丸 笹生 衛 佐藤長門 武田秀章 谷口康浩 千々和到 中山 郁 根岸茂夫 針本正行 藤澤 紫 藤田大誠 古沢広祐 ヘイヴンズ,ノルマン 松本久史 吉田敏弘
	准教授	青木 敬 遠藤 潤 加瀬直弥 菅 浩二 谷口雅博 藤本頼生
	助教	戸村 理
	助手	朝倉一貴
研究員	客員研究員	秋野淳一 阿部常樹 市川 収 加藤久子 神杉靖嗣 キロス,イグナシオ 鈴木聡子 曹 咏梅 高久 舞 高見澤美紀 鳥越多工摩 フレーレ,チャールズ 堀越祐一
	ポスドク研究員	荒木優也 伊藤大祐 井上隼人 今井信治 大塚千紗子 小野諒巳 黒田迪子 杉内寛幸 丹羽宣子 半田竜介 村上 晶
	研究補助員	尾上周平 岡谷成康 木村大樹 北澤宏明 高橋俊之 問芝志保 西村健太郎
客員教授	赤澤史朗 朱 岩石 土屋 博 ナカイ,ケイト 林 淳 古谷 毅 柳田康雄 山中 弘	
共同研究員	天田顕徳 網谷哲成 荒井祐介 李 和珍 池田奈津江 石井 匠 石川岳彦 一戸 渉 今泉宜子 植田 真 遠藤珠紀 奥山 香 小田真裕 ガイタニデイス,ヤニス 粕谷 崇 加藤元康 カドー,イヴ 金子 拓 河村忠伸 木村秀史 栗木 崇 康 成文 小林威朗 惟村忠志 齋藤しおり 坂井久能 佐々木聖使 佐藤一伯 重村光輝 芹口真結子 大工原豊 大丸真美 塚田穂高 津田 勉 筒井 裕 東郷茂彦 中野裕三 中村 大 中村耕作 西俣先子 野口生也 野中規正 ビュテル,ジャン=ミシェル 平本謙一郎 冬月 律 牧野元紀 森 悟朗 矢崎早枝子 安高啓明 山口 晃 吉田律人	

## 平成29年度 事務局人事一覧

学術メディアセンター事務部長	及川 聡
学術メディアセンター事務部情報システム担当次長	堀内弘行
学術メディアセンター事務部図書館事務課長	安達 匠
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	飯塚陽子
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課	杉崎正彦 小倉 健 小平浩衣 織田泰輔 相川由起 志水志保(博物館担当) 網谷哲成 石井 匠 佐々木理良(嘱託学芸員)

# 彙報

## 会議

### ○全体

- ・平成二十八年度第四回運営委員会、平成二十九年一月十二日(木)十五時五十分～十六時三十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十八年度第四回人事委員会、平成二十九年二月十五日(水)十七時～十七時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第五回運営委員会、平成二十九年二月二十二日(水)十六時十分～十六時三十五分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十八年度第五回人事委員会、平成二十九年二月二十四日(金)(持ち回り稟議)
- ・平成二十八年度第六回運営委員会、平成二十九年三月十四日(火)(持ち回り稟議)
- ・平成二十八年度第七回運営委員会、平成二十九年三月十五日(水)(持ち回り稟議)
- ・平成二十八年度第六回企画委員会、平成二十九年三月十五日(水)十一時～十二時七分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第六回人事委員会、平成二十九年三月十五日(水)

- 十二時～十二時十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第一回企画委員会、平成二十九年四月十九日(水)十一時五分～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第一回人事委員会、平成二十九年四月二十五日(火)十二時十五分～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第一回教員等資格審査委員会、平成二十九年四月二十五日(火)十二時三十分～十二時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第一回運営委員会、平成二十九年五月十一日(木)十五時五十分～十六時十五分、若木タワー四階会議室○五
- 日本文化研究所
- ・平成二十八年度第六回所員会議、平成二十九年三月八日(水)十時三十分～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十九年第一回所員会議、平成二十九年四月十二日(水)十一時～十二時十四分、A M C棟五階会議室○六
- 学術資料センター
- ・平成二十九年第一回学術資料センター会議、平成二十九年四月十九日(水)十六時～十六時三十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- 校史・学術資産研究センター
- ・平成二十九年第一回校史・学術資産研究センター会議、平成二十九

- 年四月十二日(水)十一時～十一時三十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- 研究開発推進センター
- ・平成二十九年第一回研究開発推進センター会議、平成二十九年四月五日(水)十六時～十六時五十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- 國學院大學博物館
- ・平成二十九年第一回國學院大學博物館会議、平成二十九年四月十九日(水)十四時～十四時三十分、A M C棟地下一階博物館ワークショップスペース
- ・平成二十九年第一回國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会會議、平成二十九年四月二十七日(木)十七時～十八時十五分、A M C棟地下一階博物館ミュージアムホール
- 古事記学センター
- ・平成二十八年度第一回古事記学研究実施委員会、平成二十九年三月九日(木)十二時十分～十二時四十分、若木タワー地下一階会議室○三
- ・平成二十八年度第一回古事記学センター會議、平成二十九年三月三十日(木)十四時～十五時十分、若木タワー地下一階會議室○三
- ・平成二十九年第一回古事記学研究実施委員会、平成二十九年五月十一日(木)十五時三十分～十五時五十分、若木タワー四階會議室○五

## 公開講座・講演会 シンポジウム・関連学会

### ○全体

- ・第四十三回 日本文化を知る講座、各回、十三時三十分～十五時、A M C棟一階常磐松ホール
- ◇第一回 六月三日(土)、テーマ「古典からみる日本文化」、講師「渡邊卓(研究開発推進機構助教)」「皇典講究所・國學院と「古事記」、講師「針本正行(文学部教授)」「物語絵巻・絵草紙を読む」
- ◇第二回 六月十日(土)、テーマ「國學院大學の考古学」、講師「内川隆志(研究開発推進機構教授)」「國學院大學の考古学とコレクション形成」、講師「笹生衛(神道文化学部教授)」「神道考古学から祭祀考古学へ」
- ◇第三回 六月十七日(土)、テーマ「グローバル時代の日本文化」、講師「星野靖二(研究開発推進機構助教)」「日本の外から見る(日本文化)」、講師「井上順孝(神道文化学部教授)」「(日本文化)を誰に伝えるか」
- ◇第四回 六月二十四日(土)、テーマ「祭りと日本文化」、講師「大東敬明(研究開発推進機構助教)」「資料からみた祭り」、講師「加瀬直弥(神道文化学部准教授)」「一宮の祭祀?」

## 出張

- 日本文化研究所
- ・遠藤潤・齋藤公太・芹口真結子、

「明治期国学・神道関係人物に関する史料の調査」のため、平成二十九年二月六日(月)～二月八日(水)、滋賀県彦根市

#### ○学術資料センター

・深澤太郎、黒田迪子、石垣絵美、「櫻井満氏、齋藤ミチ子氏イザイホー関係写真資料に関する現地踏査」のため、平成二十九年二月二十日(月)～二月二十三日(木)、沖縄県南城市(久高島)

#### ○研究開発推進センター

・宮本誉士・上西亘・高野裕基、「霧島神宮に関する調査・研究」のため、平成二十九年二月二十四日(金)～二月二十六日(日)、鹿児島県霧島市  
 ・宮本誉士・上西亘・高野裕基、「霧島神宮に関する調査・研究」のため、平成二十九年三月十日(金)～三月十二日(日)、鹿児島県霧島市  
 ・古沢広祐・茂木栄・宮本誉士・杉内寛幸、「岩手県における東日本大震災被災地の復興に関する現地調査」のため、平成二十九年三月十四日(火)～三月十七日(金)、岩手県沿岸地域  
 ・宮本誉士・大東敬明、「北海道神宮に関する調査」のため、平成二十九年三月二十三日(木)～三月二十四日(金)、北海道札幌市

・大東敬明、「札幌まつり調査」のため、平成二十九年六月十五日(木)～六月十六日(金)、北海道札幌市

#### ○國學院大學博物館

・井上順孝、平藤喜久子、網谷哲成、

「アメリカの博物館における宗教文化、日本文化を中心とする展示調査」のため、平成二十九年二月五日(日)～二月十一日(土)、アメリカ・ワシントンD.C.、ニューヨーク(※)  
 ・深澤太郎、及川聡、尾上周平、「國學院大學博物館と西南学院大学博物館による研究協力協定にともなう展示及び打合せ」のため、平成二十九年五月二十三日(火)～五月二十五日(木)、福岡県福岡市  
 ※は平成二十八年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業に採択された、東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業にて実施。

#### 刊行物

##### ○全体

・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第九号(平成二十九年三月三十一日発行)  
 ・研究開発推進機構『機構ニュース』通号十九(平成二十八年六月二十五日発行)  
 ・研究開発推進機構『機構ニュース』通号二十(平成二十九年二月二十五日発行)

##### ○日本文化研究所

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編・井上順孝責任編集『日本文化』はどこにあるのか(春秋社、平成二十八年八月二十五日発行)

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第九号(平成二十八年九月三十日発行)  
 ・國學院大學日本文化研究所編『学生宗教意識調査総合報告書(一九九五年度～二〇一五年度)』(平成二十九年二月十日発行)

#### ○学術資料センター

・学術資料センター(神道資料館部)『國學院大學神道資料館館報』第十六号(平成二十九年二月二十八日発行)  
 ・学術資料センター(神道資料館部)『神輿文化を考える』(平成二十九年二月二十八日発行)  
 ・学術資料センター(神道資料館部)『祭祀・祭礼の変遷―古代・中世を中心に』(平成二十九年二月二十八日発行)

#### ○校史・学術資産研究センター

・校史・学術資産研究センター『校史』第二十七号(平成二十九年三月六日発行)  
 ・校史・学術資産研究センター『國學院の古典学』(平成二十九年三月六日発行)  
 ・校史・学術資産研究センター『國學院大學校史・学術資産研究』第九号(平成二十九年三月七日発行)

#### ○研究開発推進センター

・研究開発推進センター渋谷学研究會田原裕子編『別冊渋谷学ブックレット 渋谷らしさの近未来』(平成二十八年十一月二十一日発行)

・研究開発推進センター渋谷学研究會上山和雄編『渋谷聞きがたり4 セピア色のころ―昭和三〇年代の國學院女子学生―』(平成二十九年二月二十八日発行)

・都市民俗学研究会(研究開発推進センター内)『都市民俗研究』第二十二号(平成二十九年二月二十八日発行)

・研究開発推進センター渋谷学研究會上山和雄編著『渋谷学叢書5 渋谷にぎわい空間を科学する』(雄山閣、平成二十九年二月二十八日発行)

・研究開発推進センター『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十一号(平成二十九年三月十日発行)

・研究開発推進センター編・古沢広祐責任編集『共存学4 多文化世界の可能性』(弘文堂、平成二十九年三月十五日発行)

#### ○國學院大學博物館

・『國學院大學博物館研究報告』第三十三輯(平成二十九年二月二十八日発行)  
 ・國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会『東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業報告書』(平成二十九年二月発行)

#### ○古事記学センター

・國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業・文部科学省私立大学研究ブランディング事業成果報告論集『古事記学』第三号(平成二十九年三月十日発行)

## 資料紹介

## 一英斎芳艶画 新材木町附祭礼

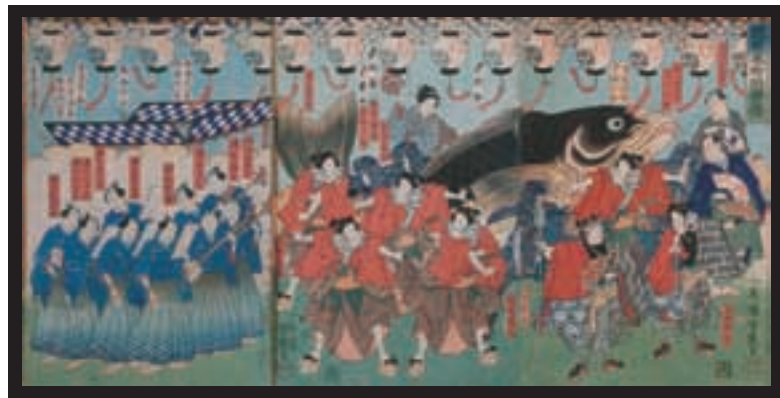
一英斎芳艶（歌川芳艶）（一八二二～一八六六）画「新材木町附祭礼」（三枚続）は、文久二年（一八六二）五月（旧暦）の出版であり、同年六月の江戸山王権現（現在の日枝神社（永田町）・山王祭に新材木町（現在の東京都中央区日本橋付近にあった）が出した附祭を描いたものである。

芳艶は、歌川国芳の門人であり、一栄斎とも号した。祭礼を描いたものには「祭礼図」（国芳と合作）、「神明神御祭禮の図」、「天王御祭礼の図」ほかがあり、本資料と同じ文久二年のものに、後述する「新乗物町附祭礼」及び本資料とは別構図の「新材木町附祭礼」がある。彼は堀江町、浅草橋場、日本橋本町二丁目に住んだ。このため、これらの祭礼は馴染み深いものであったのであろう。

さて、山王祭は神田明神の神田祭と隔年で行われ、両祭礼ともに、祭礼行列が江戸城内に入り、將軍も上覧することがあった。

山王祭の祭礼行列には、神社が出す神輿及び社家、警固の人々、氏子の町々より出された山車（出し）や附祭、幕府からの援助によるお雇い祭が加わった。

附祭は、山車の後ろにつくもので、いくつかの当番町が出した。これは踊り、練り物、曳き物など、氏子の



一英斎芳艶「新材木町附祭礼」

人々が趣向を凝らして出したものである。江戸城内の上覧場などの前では、唄や寸劇などの芸能を披露した。「新材木町附祭礼」には、同町の出世稲荷神社の祭礼を描いたものとする見解もある（日本芸術文化振興会・文化デジタルライブラリー、同資料に山車を出していること、また後述

の理由から、山王祭の附祭を描いたものと考える。

文久二年の山王祭について、『山王御祭礼番附』（文久二年、森屋治兵衛）（國學院大學図書館宮地直一コレクション所蔵）（以下、『番附』）をみると、小網町が「七五三の見立」、新材木町・新乗物町が「正五九の見立」、大鋸町・本材木町五・六・七丁目目が「松竹梅の見立」を出している。「正五九の見立」は両町が出した「日の出松に鶴の出し」に続き、「正月若菜摘之見立 練物」、「五月甲人形之学び 地走」、「九月節句之学 踊台」より構成されている。

本資料をみると「五月」「正」「五」「九」と記された扇子を持つ人々がいる。また、五月の節句をモチーフにし、鯉を連想させる巨大な真鯉が描かれる。「鯉遣」の人名も書かれるから、この鯉は動いたと考える。「番附」では、煙が箱から出る様子や大きな真鯉が描かれ、外神田御成道で書肆を営んだ藤岡屋由蔵の日記（『藤岡屋日記』文久二年六月十五日）には、一人が鎧櫃を出し、そこから手品の物を差し出した。また、後に鋳の造り物を動かしたとする。

この附祭に参加している人物の名前を本資料と『番附』とで比較すると、一致するものが多い。このことから、本資料は文久二年の山王祭に新材木町・新乗物町が出した「正五九の見立」のうち、「五月甲人形之学び 地走」に相当するものと考えた

い。伝統芸能情報館等は芳艶が描いた別構図の「新材木町附祭礼」（三枚続）



『山王御祭礼番附』（文久2年）

を所蔵する。こちらには在原業平や小野小町等に扮装する人々が描かれており（日本芸術文化振興会・文化デジタルライブラリー参照）、『番附』との比較から、これは「九月節句之学」であると考える。

国立歴史民俗博物館は芳艶が描いた「新乗物町附祭礼」二枚（おそらくは三枚続きの残欠）を所蔵している（館蔵資料データベース参照）。こちらも『番附』と比較すると共通する点が多く、「若菜摘之見立」にあたりと考える。国芳の次女・芳女画「五節句の内 三節の見立 新材木町 新乗物町」も、同様である。

以上、本資料を含め、文久二年に芳艶が描いた「新材木町附祭礼」（二種）、「新乗物町附祭礼」は、この三種で同年の山王祭に新材木町・新乗物町が出した「正五九の見立」を描いたものであるといえる。

（文責・大東敬明）